

お小遣い・お金と金銭感覚

日韓中越の子どもたちの生活世界の豊かさ・貧しさの考察

呉 宣児

はじめに

「友人関係にお金がかからむととかくトラブルになりやすい」「金銭が介在すると、どうしても主従関係のようなものができあがってしまう」という文が、百マス計算を主張して有名になった陰山(2003)の「学力は家庭で伸びる」という本に書いてあった。おそらく、日本で生まれ育っている子どもの多くは、このことばは当たり前のこととして捉えていると思われる。

一方で、子どもがどのような地域・国で生まれ育っているかによって、生活の様子や認識など様々な面に違いがあるだろうと想像することは難しくない。お金・お小遣いの意味の捉え方や使い方についてはどうであろうか。国（地域）の経済的な貧困さ・豊さによっても子どもたちの金銭感覚・お金に関わる価値規範は異なるだろうか。

子どもとお金に関連する研究は、社会科目に関連して、貯金や銀行、投資の仕組みなどに関連した領域で、社会のなかの経済システムの一面をどれくらい理解しているのか・理解させられるのかに関するものが多い。

筆者はここ約 10 年にわたって日本・韓国・中国・ベトナムにおけるお金をめぐる子ども達の生活世界を探る研究プロジェクトに参加してきた。本プロジェクトでは、子どもたちの経済認識としてのお金ではなく、一つの文化的道具としてのお金に着目し、お金をめぐる生活の価値規範、友達関係、親子関係などを検討してきた。本研究では、文化的道具としてのお金に関する価値規範などをとらえつつ、それは国の経済的なレベルとどんな関連性があるのかについても含めて検討する。

表 1 IMF 基準の日韓中越の GDP (2011 年予測値)

	()世界順位			
	日本	韓国	中国	ベトナム
国内総生産(GDP)(10億 US \$)	5,855.38(3)	1,163.84(15)	6,988.47(2)	103.57(58)
一人あたりの GDP(US \$)	42,820(16)	20,591(33)	4,382(92)	1,174(137)
一人当たりの購買力評価(US \$)	33,805(24)	29,836(25)	7,519(93)	3,134(126)

注: 2012 年1月 24 日現在の資料

日韓中越は同じアジア地域に位置する国で、伝統的に儒教の影響があり、お箸を使う食文化を持っているなど類似した点もあるが、一方で社会・経済的背景はかなり隔たりがあるとも言える。2010年IMF発表基準の4カ国の一人当たりのGDPや購買力評価（表1参照）をみると、個々人の経済的豊かさは日本、韓国、中国、ベトナムの順に高いと捉えられる。経済的な豊かさの順に子どもの消費世界は広がっているかもしれないが、経済的な豊かさや消費世界の広がり、そのまま子ども達の生活世界の豊かさにつながるのだろうか、あるいは、経済的豊かさが生活世界への負の関連があるとするならば、どのように関連されているかも含めて検討していきたい。

本研究では、筆者が参加した研究プロジェクトの中で調査してきたデータを基に、お金をめぐる日韓中越の子どもたちの生活世界の一面を捉える。まず、質問紙調査から得られたデータを基に、日韓中越の子どもたちのお金・小遣いのもらい方・使い方をめぐる規範、お金を媒介とする親子関係、友達関係といった、お金をめぐる子どもたちの生活の様子を描くこと、次に日韓中越の子ども達のお金をめぐる認識の分析を通して子どもの生活世界の豊かさについて考察をすることを本研究の目的とする。

方 法

質問紙調査の概要：主な質問項目は中国朝鮮族を対象とした調査（山本・片,1999 他）で用いられたインタビューや観察調査（山本他、2003）を踏まえ、日韓中の研究グループで討議し、比較調査の実施を念頭に置きつつ作成したものである。主な内容は、①お小遣いのもらい方（入手経路別の頻度と目的別の頻度）、②お小遣いの使い方（支出経験）、③お小遣いをめぐる価値観（使用の善悪判断、使用の許容度判断、お小遣いをめぐる親子関係、お小遣いをめぐる友達関係）に分けられる。

分析対象者および調査時期は表2に示す。すべての調査は、授業内に集団式で行い、無記名式で回収した。

表2 質問紙調査対象者人数（国別・学年段階別・性別）

	日本 (大阪) 2002年11月			韓国 (ソウル) 2003年7-8月			中国 (北京) 2005年12月 -2006年2月			ベトナム (ハノイ・ハイ フォン) 2004年7-8月		
	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計
小学5年生	149	143	292	119	107	226	126	124	250	88	109	197
中学2年生	122	125	247	131	123	254	101	138	239	100	99	199
高校2年生	66	108	174	136	126	262	63	139	202	190	198	388

結 果

1. 子どもが手にするお金（もらい方）

子どもはどのような形でお金をもらっているのか：お金をもらう期間や額が厳密に決ま

っていて、決まっている通りにお金をもらうのか（定期定額）、あるいは期間や金額が厳密に決まっているわけではなく流動的に、必要に合わせてほしいの期間にほしいの金額をもらっているのか（不定期不定額）という質問に対する結果を図1に示した。

大阪では小・中学生に定期定額のもらい方が多く、ソウルはどの学年段階でも不定期不定額のもらい方が比較的に多いが、その次中高生では定期定額の割合が多い。北京とハノイ・ハイフォンは比較的にもらわない割合が多い、その次不定期不定額のもらい方の割合が多い。日本の小中学生に定期定額の割合が多いなか、高校生になって急にもらわない割合が高くなっていることは、日本の高校生は進学校ではない場合はアルバイトをすることも多く、その場合は親からお小遣いをもらわなくなる現象の現れとして解釈できるので、中国やベトナムにおけるもらわないとは意味が異なると考えられる。

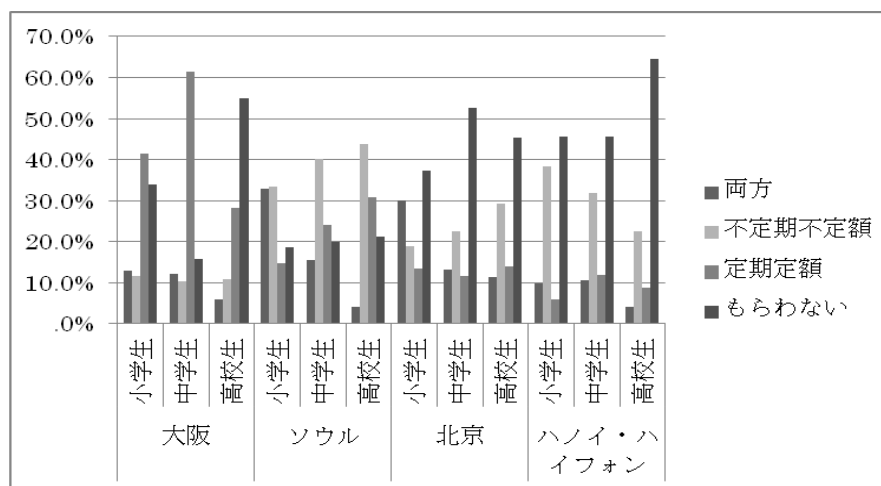


図1. 4都市における子どものお金のもらい方

非日常的なお金のもらい方（入手経路別・目的別にもらうお金）： だいたい何に使うという目的があって親からもらうお金以外にも、子どもにはいろんな経路や理由でお金をもらう場合がある。「父母の友人から」「親戚から」「成績優秀のご褒美で」「お手伝いのご褒美で」「お年玉」「誕生日のお祝い」「特別な目的で」もらうお金など16項目で構成された「入手経路別・目的別のお金」に関して、3件法で頻度を評定してもらい、その得点を用いて探索的因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。固有値の軽減状況と解釈のしやすさから3因子が妥当であるとした。第1因子は、「お父さんの友人やお母さんの友人など他の大人がくれるお金」「親戚が訪ねてきたときにくれるお金」の項目が入っているので、「人間関係経由のお金」と命名した。第2因子は、「お年玉」「誕生日にもらうお金」「特別に要求してもらうお金」等の項目が含まれており、「特別な場合にもらうお金」と命名した。第3因子は、「成績優秀のご褒美」「お手伝いのご褒美」、「アルバイトでもらうお金」等が含まれており、「報酬としてもらうお金」と命名した。

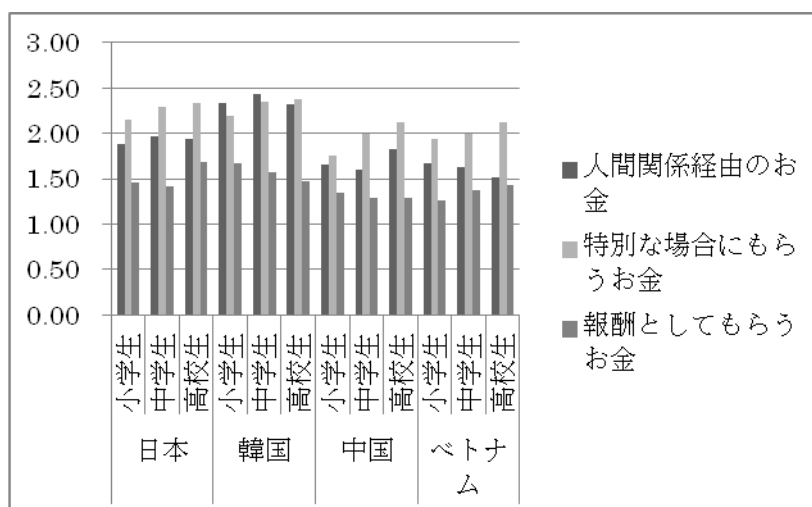


図2. 「入手経路別・目的別お金」各因子尺度得点

図2に、各因子得点の4都市別学年別の得点平均を示した。韓国で比較的高い割合を示す因子は、「人間関係経由のお金」である。中国とベトナムに比べると日本と韓国は特別にもらうお金が高い値を示している。報酬としてもらうお金はどの国においても値が低い。4都市のなかでは、日本の高校生と韓国の小中学生が1.5を超えており、中国とベトナムは低い方である。

子どもがもらっているお金の額：図3は、子どもたちがもらっているお金の額を日本の貨幣単位である円に換算して示したものである。国によって生活のレベルや物価が異なるので、単純に比較することはできないが、それでも個々人のお金と関連する生活をみるための背景として参考になる。

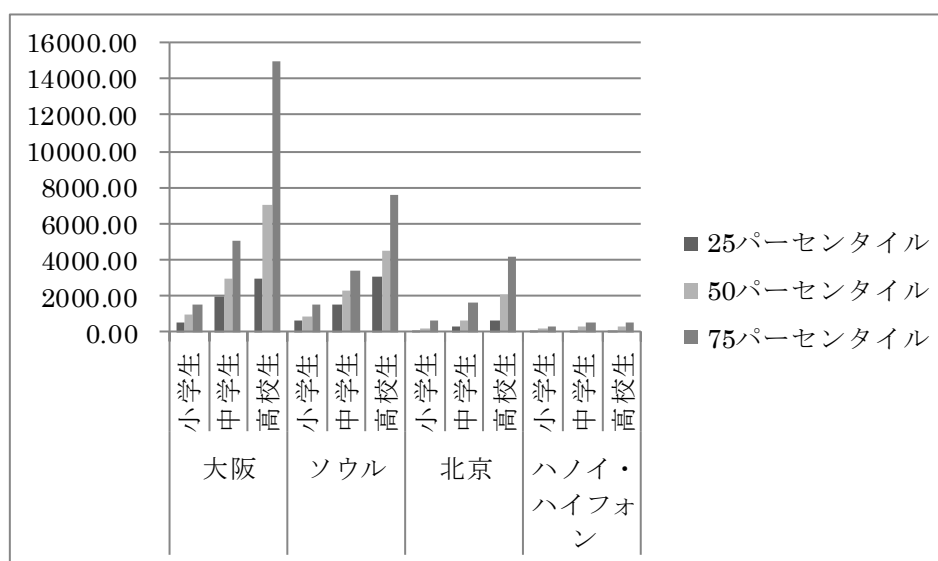


図3 子どもが報告した毎月もらうお金（円に換算基準）

4都市すべてにおいて、小・中・高校へ上がるほと、もらっている金額が上がっている様子は共通である。韓国と日本の方がもらっている金額は相対的に高く、中国・ベトナムの方が低い。日本の高校生はもらっている金額が高いことが目立つが、やはり日本の高校生はアルバイトをする場合もあることが反映されているように思われる。

ここまで4都市の子どもたちのお金のもらい方（親からのお金のもらい方、非日常的な入手経路別・目的別のお金のもらい方）を見てきた。予約すると、日本は「定期定額にもらうお金と特別にもらうお金」が特徴的で、韓国は「不定期不定額にもらうお金と人間関係経由のお金」が特徴的である。また中国やベトナムは日韓に比べると「もらわない」が多いが、もらう場合は「不定期不定額・特別にもらう」割合が比較的多かった。

2. 誰（親・子）がどんなところにお金を使っているのか

お金を支払う項目や支払い主体の移行： 実際に子どもたちはどのようなことに、どうやってお金を払っているのだろうか。「文房具を買う」「友達におやつをおごる」など計25項目に対して「1. そういうものにお金を払ったことがない」「2. 親がはらってくれる」「3. 親から特別にお金をもらう」「4. 自分のお小遣いやお年玉で払う」のうち当てはまるものを選んでもらった。その4つの選択肢の選択割合の、学年による変化パターンの項目間での共通性を取りだすため、クラスター分析（グループ間平均速決法）を行った。各国4つのクラスターに分類し、内容に合わせて再整理して表4にまとめた。各クラスターの項目は、学校段階による支払い方の変化が共通の項目群を構成していると考えることができる。

クラスターの名は小学校5年生と高校2年生の時の支払いの主体の変化を見て命名した。例えば、小学校の5年生の段階で親の支出が優勢で高校2年生までそれが続く場合は「親支出継続」、小学校5年生の段階では親支出が優勢だが、高校2年生では子支出が優勢の場合は「親支出から子支出へ」、小学校5年の時は親も子も非支出の優勢が高校2年生の段階では子支出に変わっている場合「非支出から子支出へ」になる。表4は、小学校5年生の支出のパターンをベースにして、支出パターンの変化をまとめたものである。下線を引いた項目は、グループ毎に4カ国で共通しているものである。

「親支出ベース」を見ると、学校納付金や家の食材などは親支出継続だが、そのほかは、「親支出から子支出へ」「親支出から親特別へ（特別に親にもらってから自分で支出）」の項目になっている。4つの国による程度の差はあるにせよ、小学校5年生の段階から高校2年生になっていくにつれて、親が払う・親と一緒に支払うという行動パターンから、子どもが親から離れた状態で自分が支払うパターンになっていることとして捉えられる。

子支出ベースのところをみると、具体的な支出項目は日本がもっとも多く、相対的に中国とベトナムの項目数がすくないことから、比較的日本や韓国の方が小学校の段階から消費世界への参加が広がっていることが読みとれる。しかし、非支出ベースの部分を見ると、中国やベトナムにおいては非支出から子支出へなっている項目が多く、中国やベトナムで

も高校 2 年生の段階では子どもが参加する消費の領域が広がり、親主体の消費から子ども主体の消費へ移行していく様子が伺われる。

表 4. 消費項目の国別クラスター分析のまとめ

親支出ベース	親支出継続	日本クラスター1	食材；学校納付金；参考書・問題集；交通費；日用品；
		韓国クラスター1	食材；学校納付金；外食；
	親支出から子支出へ	日本クラスター2	自分の服；遊園地；外食；映画；文房具；
	親支出減少と親特別増加	韓国クラスター2	参考書・問題集；交通費；自分の服；遊園地；日用品；
	親支出減少と子支出増加	中国クラスター1	食材；学校納付金；参考書・問題集；交通費；自分の服；遊園地；日用品；映画；文房具；外食；お菓子や飲み物；
	親支出から親特別にへ	ベトナムクラスター1	食材；学校納付金；参考書・問題集；交通費；自分の服；文房具；ゲームセンター；
	親支出減少と非支出継続	ベトナムクラスター2	遊園地；日用品；おもちゃ；アクセサリ；映画；
子支出ベース	子支出優勢増加	日本クラスター3	貯金；寄付；友達にプレゼント；家族にプレゼント；お菓子や飲み物；おやつを友達におごる；CD；ゲームセンター；アクセサリ；カラオケ；友達にお金を貸す；おもちゃ；漫画；
		韓国クラスター3	貯金；寄付；友達にプレゼント；家族にプレゼント；お菓子や飲み物；おやつを友達におごる；CD；ゲームセンター；アクセサリ；カラオケ；文房具；映画；
		中国クラスター2	貯金；寄付；友達にプレゼント；家族にプレゼント；
		ベトナムクラスター3	貯金；寄付；友達にプレゼント；家族にプレゼント；お菓子や飲み物；おやつを友達に；CD；お金を友達に；漫画；外食；
非支出ベース	非支出から子支出へ	日本クラスター4	友達と賭け事；友達にご飯をおごる；
		韓国クラスター4	友達と賭け事；友達にご飯をおごる；おもちゃ；漫画；
		中国クラスター3	友達にご飯をおごる；カラオケ；おもちゃ；漫画；アクセサリ；ゲームセンター；CD；おやつを友達に；お金を友達に；
	非支出減少と子支出増加	ベトナムクラスター4	友達と賭け事；友達にご飯をおごる；カラオケ；
	非支出継続	中国クラスター4	友達と賭け事；

子どもたちは何を買いたいのか： 消費世界が広がるとほしくなるものも増えていく。今の子どもたちは何がほしいと思うのだろうか。「もしお金がたくさんあるなら、一番買いたいものは何か」を尋ね、自由記述で書いてもらった回答を、国別に上位 5 位までの項目を

表5にまとめた。

大阪とソウルにおいて1位を示したのは服で、そのほかゲームや音楽映像などが日韓共通にあげられていた。日韓の子どもたちの消費欲求は、勉強や生活必需品というより、おしゃれや趣味・娯楽関連に広がっていると考えられる。ベトナムでは本や文房具、自転車など学業や日常の移動に必需とされる項目があげられており、趣味領域の項目は5位以内には入っていない。日本には第3位に「なし」があげられている。お金があっても特に買いたいものがないということは、自分の身の周りで使うものは十分与えられていると捉えることができる。中国では本や父母へのプレゼントなどが上がっており、また、趣味と関連する電気製品があがっている。子どもが持ちたい・ほしいと思う欲求の背景には子どもたちの前に広げられた消費世界があることを考えると、ベトナムの消費領域は他の国に比べるとそれほど広がっていないことが伺われ、日本や韓国の子どもたちは、＜消費する領域＞に入り込んでいる割合が多いと捉えられる。

表5. 子どもの買いたいもの:項目と割合

順番	大阪		ソウル		北京		ハノイ・ハイフォン	
	項目	割合	項目	割合	項目	割合	項目	割合
1	衣類	28.30%	衣類	21.30%	本	17.70%	本	16.50%
2	ゲーム	12.50%	音楽映像	11.50%	コンピュータ	9.20%	文房具	11.60%
3	なし	7.00%	携帯電話	7.90%	音楽映像	7.10%	衣類	10.40%
4	家	5.70%	コンピュータ	7.80%	父母へのプレゼント	6.40%	自転車	9.00%
5	音楽映像	5.60%	靴	6.20%	ゲーム	4.60%	コンピュータ	8.40%

3. お金と関わる子どもたちの価値規範

お金と関連する友達関係：子どもたちは友達と関連して、どのようにお金を使うべきだと考えているのだろうか。ここでは、お金を媒介とした友達関連の項目を見てみよう。「友達からおごってもらったら、次に私がおごるのが当たり前である」「友達から借りたお金はたとえ小額でもきちんと返さないといけない」など13項目に関して、「全く反対」1点～「非常に賛成」5点として得点化した。

これらの項目の得点を用いた探索的因子分析結果（主因子法、バリマックス回転）を表6に示した。因子分析の結果、2因子が抽出された。第一因子は「私は友だちからおごっても

らうと負担に思う」「友だちからお金を借りることは、たとえ、小額でも相手に迷惑になると思う」などおごり合いや貸し借りに関してネガティブに捉える内容で自分の分は自分に限定して使うという内容だったので、「自己限定」因子にした。第2因子には「友達がお金で困っているなら私は迷わず貸してあげることができる」「友達にお菓子などを買ってあげるのは、一人で食べるより楽しい」など、おごりや貸し借りをポジティブに捉え、お互いの物を交換することを好む内容だったので、「相互交換」因子にした。

各因子の尺度得点を用いて、4都市（大阪・ソウル・北京・ハノイ）各学年段階（小・中・高）の平均を表7にまとめ、図4、図5にプロットした。「自己限定」の得点は、4都市の中で日本の得点がもっとも高く、韓国の得点はもっとも低い。また、小中高への変化はどの国においても学年が上がるにつれて得点が下がっている。

表6 友だち関係尺度 探索的因子分析結果（主因子法、バリマックス回転）

	自己限定	相互交換	共通性
8.私は友だちからおごってもらうと負担に思う。	0.62	0.11	0.40
6.友だちの間でおごったりおごられたりするのはいくはない。	0.62	-0.35	0.50
7.友だちの間でお金の貸し借りをするのはいくはない。	0.58	-0.31	0.43
12.友だちからお金を借りることは、たとえ、小額でも相手に迷惑をかけることになる。	0.45	-0.11	0.21
4.私が友だちにおごと、その友だちは負担に思うだろう。	0.41	0.09	0.18
5.友だちがお金で困っているなら、私は迷わず貸してあげることができる。	-0.13	0.59	0.36
10.友だちにお菓子などを買ってあげるのは、一人で食べるより楽しい。	-0.07	0.55	0.31
3.友だちからおごってもらったら、次に私がおごるのがあたりまえである。	0.07	0.52	0.27
固有値	1.50	1.17	

「自己限定」の得点は、4都市では日本が最も高く、韓国が最も低い。日本は自己限定に関しては小中高校すべてにおいて、得点平均は3以上であり、自己限定的なやり方をもっとも好んでいる。一方韓国・中国・ベトナムは自己限定に関する得点平均は3以下がほとんどで、どちらかという自己限定的やり方は好まれてないことが分かる。また、「相互交換」の得点は、日本が最も低く、ベトナムが相対的に高いが、4都市すべての学年において、平均3は越えている。相互交換に関しては、日本・韓国・中国は小学生の時より高校になるにつれて得点が高くなる傾向があり、ベトナムは最初から得点が高く学年による差はあまりないと捉えられる。

これらの結果は、日本の子ども達はおごりや貸し借りよりは、自分のことは自分で解決することをより好み、おごり合いや貸し借りをする相互交換は相対的に好まないこととして捉えられる。反対に、韓国の子どもたちは、自分の分は自分で解決することに限定する

表 7 「友だち関係」因子 各因子尺度得点 4 都市・各学年段階の平均

	日本			韓国			中国			ベトナム		
	小学生	中学生	高校生	小学生	中学生	高校生	小学生	中学生	高校生	小学生	中学生	高校生
自己限定	3.71	3.45	3.23	2.95	2.50	2.56	3.05	2.96	2.98	2.86	2.68	2.75
相互交換	3.34	3.24	3.61	3.56	3.88	4.06	3.44	3.85	3.98	4.17	3.91	4.15

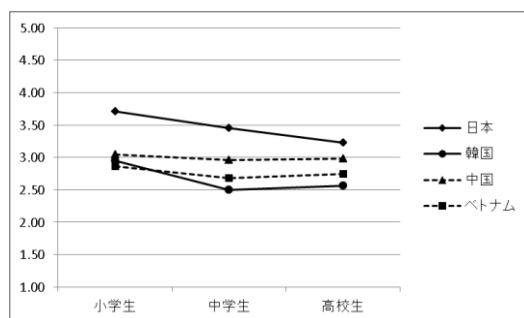


図 4 「自己限定」の4カ国比較

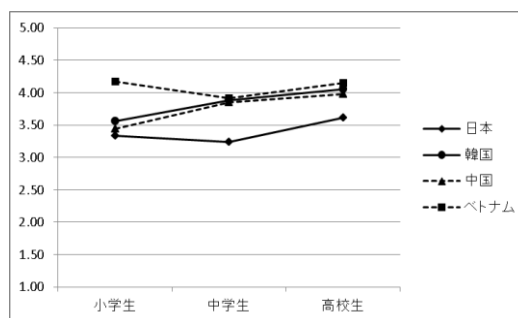


図 5 「相互交換」の4カ国比較

より、互いにおごり合い、貸し借りをするやり方を相対的に好んでいると捉えることができる。中国とベトナムは日本と韓国の間の域に値を占めているが、どちらかという韓国寄りの様子がうかがわれる。

お小遣いは子のお金？親のお金？（お金を媒介にする親子関係の認識）：前節で、お金のもらい方が4都市において、定期定額のみらい方、不定期不定額のみらい方、普段はもらわず特別な時にもらうやり方など、それぞれお金のもらい方が異なることを示した。必要な時に毎回お金の要求をすることと、特別に要求しなくてもいつも決まった期間に決まった金額を親からもらう場合に、お金を媒介にする親子関係の認識は異なるのだろうか。

「もし私に臨時にたくさんのお金ができたら、その月のお小遣いをへらされてもよい」「親が私にお小遣いをくれることを約束したら、どんなことがあってもその約束はまもるべきである」など7項目に対して、「1. 全く反対」～「5. とても賛成」のいずれに当てはまるか回答してもらい、5点として得点した後、探索的因子分析（主因子法、バリマックス回転）をおこなった（表8参照）。因子分析の結果、2因子構造が採択された。第1因子には「親は私から借りたお金をかえさなくてもいい」などの項目から、「自分の金も親の金意識」に命名した。また、第2因子には、「親が私にお小遣いをくれることを約束したら、どんなことがあってもその約束はまもるべきである」への因子負荷量が高いことから「自分の金確保意識」と命名した。

それぞれの因子において、負荷量が.40以上を示す項目の平均値を因子得点（尺度得点）とし、国別（日本・中国・韓国・ベトナム）別、学年段階別の平均を表9に示した。

「自分の金も親の金意識」においては、日本は2.5をわずかに越える数値ではなるが、とちらでもないに近く、ソウル・北京・ハノイにおいてはすべて3.0を超えており、自分が持っているお金でも本当は親のお金という意識が高いことが分かる。一方、「自分の金確保意識」においては、日本の大阪の値がもっとも高く、自分の分を権利として要求している

雰囲気が強いと言える。また、ソウルと北京、ベトナムの小学生においては平均3点を超えており、日本ほどではないが、どちらかという親から自分の分のお金を確保しようとしていることが分かる。

表8 親子関係尺度 探索的因子分析結果（主因子法、バリマックス回転）

	「自分のお金も 親のお金」意 識	「自分のお金 確保」意識	共通性
2.親は私から借りたお金を返さなくてもいい。	0.69	0.00	0.48
3.もし私に臨時にたくさんのお金ができたら、その月のおこづかいを減らされてもいい。	0.65	-0.05	0.43
6.おこづかいをくれたのは親なので、おこづかいは私のお金ではなく親のお金である。	0.48	0.01	0.23
1.親の代わりに、私が自分のおこづかいで細かいお金を払うのはいいことである。	0.42	0.04	0.18
7.親が細かいお金がないからといって私からお金を借りるのはよくない。	-0.24	0.13	0.07
4.親が私におこづかいをくれることを約束したら、どんなことがあってもその約束は守るべきである。	-0.34	0.64	0.52
5.何かほしい物を買う時、自分のおこづかいで足りないとは私は親に足りない分を要求することができる。	0.09	0.20	0.05
固有値	2.17	1.09	

表9. 「親子関係」因子 各因子尺度得点 4都市・各学年段階の平均

		大阪	ソウル	北京	ハノイ
「自分の金も親の 金」意識	小学生	2.6324	3.4911	3.5163	4.1406
	中学生	2.5082	3.1118	3.2069	3.4885
	高校生	2.7572	3.1095	3.7352	3.6257
「自分の金確保」意 識	小学生	3.8605	3.3843	3.2470	3.0769
	中学生	4.0726	3.5913	3.3682	2.9242
	高校生	3.7799	3.7148	3.1902	2.9612

ただし、4カ国を比較してみると、日本とベトナムのパターンが最も対比的で、日本の子

どもは自分が持つお金は親のものというより自分のものという意識が強く、またお小遣いへの約束厳守などの要求も強い。一方、ベトナムの子どもは、自分が持っているお金も本当は親のお金という意識が強い分、自分の分を確実に確保しようとする要求も相対的に弱い。韓国と中国は、「自分のもの」とか「親のもの」という意識の差がそれほど大きくなく、両方とも3点代の範囲でゆるやかに認識されている。

お金の善い使い方、許される使い方は？（善悪判断と許容度判断）：子どもの消費領域が広がったとしても、子どもが自分の持っているお金で何でも自由にも買ってよいわけではない。親は親なりに、子どもは子どもなりに、善い使い方・悪い使い方の認識をしている。例えば、インタビューで代表的に出てくる答えは、「使い過ぎはよくない」「無計画的に一気に使うのはよくない」という内容である。また子どもたちは、自分が持っているお金であっても、これくらいなら親も許してくれるだろうとか、これなら親にしかられそうだななどの規範意識があるはずである。

表 10 善悪の意識、許容度の認識 因子分析結果まとめ

		善悪	許容度
遊び	カラオケに行く	0.65	0.75
	流行歌などのCDを買う	0.64	0.74
	アクセサリを買う	0.62	0.73
	ゲームセンターに行く	0.59	0.76
	おもちゃを買う	0.57	0.67
	映画をみる	0.56	0.68
	まんがを買う	0.51	0.68
	おかしや飲み物を買う	0.51	0.52
	遊園地に行く	0.50	0.50
	外食をする	0.49	0.61
	自分の服を買う	0.42	0.49
生活	家で使う日用品を買う	0.66	0.62
	参考書・問題集を買う	0.63	0.60
	家のおかずの食材などを買う	0.62	0.56
	給食費や学費など学校納付金を払う	0.52	0.49
	困っている人のために学校や教会や街などで寄付する	0.52	0.48
	文房具を買う	0.50	0.50
	通学の交通費を払う	0.46	0.57
	家族にプレゼントを買ってあげる	0.44	0.42
	おやつを友だちにおごる	0.70	0.65
友だち	友だちにご飯をおごる	0.64	0.70
	友だちにお金を貸す	0.55	0.71

善悪判断に関しては、「マンガを買う」「友達におやつをおごる」「家の食材を買う」など25項目について「1. 悪い使い方」～「3. 善い使い方」の3段階で評定してもらった。

また許容度判断に関しても、同じ 25 項目について「1. ゆるされない使い方」「2. 親の許可が必要」「3. 自由に使える」3段階に評定してもらった。25 項目の各項目得点を対象に善悪判断・許容度判断それぞれについて因子分析を実施したところ（主因子法、バリマックス回転）、いずれも 3 因子構造が採択された。各因子負荷量が高い項目（因子負荷量が.40 以上）はすべて、善悪判断・許容度判断の両因子分析において共通であった。そこで、因子分析で抽出された各因子の命名を善悪判断・許容度判断で共通とし、第一因子を「遊び」、第二因子を「生活」、第三因子を「友達」と命名した（表 10 参照）。

因子ごとに、因子負荷量が高い項目（因子負荷量 4.0 以上）の得点の平均値を、各因子の得点とし、各因子の得点を国別および学年別に表 11 にまとめた。

表 11 善悪の認識／許容度の認識 各因子尺度得点 4 都市・各学年段階

		日本			韓国			中国			ベトナム		
		小学生	中学生	高校生	小学生	中学生	高校生	小学生	中学生	高校生	小学生	中学生	高校生
遊び	善悪	1.81	2.26	2.42	1.70	1.98	2.03	1.50	1.63	1.82	1.66	1.80	1.68
	許容度	1.88	2.56	2.88	1.78	2.29	2.59	1.53	1.83	2.21	1.70	1.83	1.74
生活	善悪	2.27	2.26	2.31	2.46	2.36	2.38	2.42	2.30	2.48	2.64	2.61	2.67
	許容度	2.13	2.44	2.59	2.40	2.47	2.58	2.36	2.48	2.71	2.34	2.35	2.50
友だち	善悪	1.31	1.31	1.49	1.52	1.89	1.99	1.45	1.67	1.87	1.44	1.67	1.71
	許容度	1.39	1.63	2.12	1.67	2.37	2.70	1.49	2.08	2.46	1.38	1.79	1.96

「遊び」、「生活」、「友達」の項目すべてに、日本、韓国、中国、ベトナムに 4 カ国において共通しているのは、善い使い方・悪い使い方であるという善悪度判断より、その使い方は許されるだろうと判断する許容度判断の方の値が高いという点である。たとえ、3 点満点の真中の 1.5 点以下の善悪判断でも許容度はそれより高い値なので、それほど善いとは思わなくても実際にはお金を使っていることは 4 カ国共通として考えられる。

遊びの善悪・許容度は日本が最も高く、次に韓国、中国、ベトナムの順である。つまり、日本は遊びにお金を使ってもよいという認識されており、反対にベトナムでは遊びにお金を使うのはよくないと捉えられている。友達の善悪・許容度は韓国がもっとも高く、次に中国、ベトナム、日本の順である。つまり、韓国では友達関係にお金を使うのは善いとさえるが、日本では善くないとして捉えられている。ただし日本の高校生は友達の善悪度はベトナムより低い、許容度はベトナムより高い。つまり、善いことではないと思いながら実際にはお金があるので使っていると捉えられる。生活の善悪・許容度はベトナムがもっとも高いが、「遊び」や「友達」にくらべると 4 カ国の差の幅が比較的すくない。生活の善悪は、ベトナムより日本が低い、許容度はベトナムより日本の方が高い構造が見られることから、ベトナムでは生活にお金を使うのは善いが、実際には使うお金がすくなく、日本では生活にお金を使うのは善いこととはされないが、実際にはベトナムより使っていると捉えられる。

考 察

以上、日本・韓国・中国・ベトナムにおける子どもたちのお金のもらい方・使い方・善悪・許容度意識などをみてきた。簡単にまとめると以下の通りである。

日本の子どもは、定期定額のお金のもらい方が多く、小学校の段階から自分で払う「子支出」の項目が多い。自分のお金では勉強関連より、おしゃれや趣味にお金を使いたいと思ひ、友達との間ではおごり貸し借りは好まず、自分に限定されたお金の使い方を好む。親からもらったお金は、いったん自分の手元に来たら自分のお金だと思ひ意識が高く、自分の分としてお金を確保しようとする意識が高い。遊び関連にお金を使うことは善いと考へている。

韓国の子どもは、不定期不定額のお金のもらい方が多く、次に定期定額のもらい方が多い。相対的に小学校の時からお金を支出している。お金を自分に限定して使うより、友達との貸し借りやおごり合いに使うことを善いこととしている。日本に比べると自分のお金は親のお金だと思ひ傾向が強いが、一方では自分のお金も確保しようとする。遊びにお金を使うことを善いとする感覚は日本よりは低い、中国やベトナムよりは高い。

中国の子どもは、必要な時に必要なだけもらひ不定期不定額のもらひ方が多い。学校納付金、食材なども自分のお金から払うこともある。遊びよりは勉強関連の本などがもっとも買いたい物であり、自分のお金は親のお金だと認識する方である。

ベトナムの子どもは、日韓に比べると不定期に不定額のもらひ方が多い。小学校の時は、子支出は少なく高校になってくるとすこし増える。遊び関連にお金を使うのは善くないと捉え、勉強関連の本がもっとも買いたい物である。自分のお金は親のお金だと思ひ方で、その分、自分の分を確保しようとする意識も相対的に低い。

本研究のデータから読みとれる、4カ国における子どもたちのお金・お小遣い・金銭感覚は、子どもたちの生活の豊かさ・貧しさと関連して考へるとき、どう捉えることができるだろうか。

4カ国の一人当たりのGDPは、日本・韓国・中国・ベトナムの順であることは表1で示した。実際に子どもが手にするお金の金額も図3で示したように、同じ順であった。市場経済の拡散による子どもたちの消費世界の広がり、本研究のデータからだと、日本の子どもが小学校の段階から支出する項目が多いこと、遊び関連にお金を使うことは善い使い方だと認識していることなどが関連していると考えられる。子どもの生活にもっとも消費世界が浸透している日本で、次に韓国、中国、ベトナム順であると捉えられる。

日本の子ども達はお金のもらひ方も「定期定額」のもらひ方がもっとも多く、お小遣いは自分のお金という認識も強い。ある意味、お小遣いは自分の権利として捉えられているかもしれない。一方ベトナムでは、お小遣いは親のお金という認識が最も強く自分の分を確保しようとする意識も相対的に弱い。この現象はどう解釈すべきであろうか。

日本の子どもは権利があつて、ベトナムの子は相対的に権利がないというふうに捉えるべきであろうか。または、日本の子どもは親から離れて自分で使える自由の範囲が多いの

で、日本の子どもは自立的で、ベトナムの子どもは依存的と捉えるべきであろうか。どう解釈するにせよ、お金を媒介にする親子関係の様子は、日本は「親子が分離した形」での認識が多く、韓国やベトナムは日本に比べると相対的に「親子が密着した形」であると言える。

また、お金を媒介にする友達関係を見ると、日本の子どもは自分のお金は自分に限定して使うことが多く、韓国やベトナムは友達とおごりや貸し借りの形で使っている。この現象はどう解釈すべきだろうか。日本の子どもは自立的で、韓国やベトナムの子は依存的と見るべきなのか、あるいは、日本の子は利己的で韓国やベトナムの子は他己的と捉えるべきだろうか。どう解釈するにせよ、お金を媒介にする友達関係は、日本では「友達が分離した形」の認識が多く、韓国・ベトナムは「友達がより密着した形」であると言える。

小嶋 (2001)は、次の 3 点を指摘している。第一に、最近の子どもは、家族、地域社会、そして学校の中で、これといった役割を持たず、生産と生活上の運営に寄与しないものとなってきた。第二に、生活の仕組みから離されて、子どもは勉強をし、消費するだけの存在となった。第三に、学習に関しても消費生活に関しても、子どもと家族をターゲットとした商業主義が情報メディアを介して強い影響力をもっている。これは、近代化された社会の中の子どもたちは、大人の世界からは切り離された「子ども専用の世界」(小嶋・森下、2004) に生きているということとも通じる。また、暉峻 (2003)も、子どもは自由な自己決定権がないかわりに、小遣いやたくさんのものに囲まれ暮らしており、携帯電話、CD や MD のプレイヤー、ピアノ、コンピューターゲーム、自転車、専用のテレビ、マンガや雑誌、おしゃれな服など、消費のなかにやっと自分の個性を発揮しているかのように述べている。

これらの視点をとると、お小遣いの制度がはっきりしていることを単に子どもの権利が守られて豊かであると捉えることも難しく、他の生活の領域と関連して検討する課題が浮かびあがってくる。

浜田(2009)は、ある文化の果てに、人が自然から与えられた他者との関係性を離れて、人の世で「個」として屹立(きつりつ)してしまうことは問題であり、現代という時代は、個立を迫る文化が人々をおおい、その結果として子どもを早くからそのなかに取り込み始めると述べている。また、その中で個別性—共同性の両義性は、具体的な他者との関係の歴史をとおして、私たちの「共同」性へと展開する方向と、「一人」性の側に傾いて、これを浮き立たせてしまう方向の二つに分かれると指摘している。

浜田が指摘しているのは、本研究で取り上げた、友達関係や親子関係において、日本が「より分離した形」韓国とベトナムが「より密着した形」を示したのと一脈通じているのかもしれない。言い返せば、「個立」への方向と「共立」への方向へ分化されているとも言える。

マーカスと北山は、自己観 (construal of the self) に注目して、個人主義的自己観ともいえる独立的自己観と集団主義的自己観とも言える相互依存的自己観という概念を提起し

て、従来の欧米（主として米国）における実験社会心理学的研究の成果を相対化した（田島、2008）。主に、独立的自己観は欧米人（とりわけ、西洋民族的背景をもつ白人男性）に顕著であり、相互依存的自己観はアジア諸国、アフリカ、ラテンアメリカ、南米に顕著であると述べられている。マーカスと北山の主張は、欧米対アジアが個人主義対集団主義に二分化した固定的に捉えられた部分があるが、本研究で取り上げてきた、お金をめぐる子ども達の認識を4カ国で見た場合、日本は比較的個人主義的自己観に近く、ベトナム、中国、韓国は集団主義的自己観により近いとも言える。

浜田（2009）の視点やマーカスと北山（田島、2008）の視点を踏まえた上で、「一人性」「個立」「独立的自己観」へ方向づけられた世界に生きる子どもたちと、「共同性」「共立」「相互依存的自己観」へ方向づけられた世界に生きる子どもたちの生活世界はどちらかが豊かであると捉えるべきなのか、あるいは、それぞれの世界において、異なる豊かさがあると捉えるべきなのか、生活世界の豊かさを捉えるものさしの検討が今後必要であると考える。

文献

- 陰山英男（2003）学力は家庭で伸びる・今すぐ親ができること 41. 小学館
- 小嶋秀夫（2001）心の育ちと文化 有斐閣
- 小嶋秀夫・森下正康（2004）児童心理学への招待「改訂版」—学童期の発達と生活—サイエンス社
- 田島信元（2008）文化心理学 朝倉書店
- 暉峻淑子（2003）豊かさの条件
- 浜田寿美男（2009）子ども学序説 岩波書店
- 山本登志哉・片成男（1999）中国朝鮮族中高生のお小遣い 第10回日本発達心理学会大会発表論文集 pp212.
- 山本登志哉・高橋登・サトウタツヤ・片成男・呉宣児・金順子・崔順子（2003）お金をめぐる子どもの生活世界に関する比較文化的研究：済州島調査報告書 共愛学園前橋国際大学論集第3号, 13-28.

付記

本研究は2006年度～2009年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1）（海外））（研究課題名：「お金という文化的道具の修得と東アジアの子どもの生活世界：差の文化心理学の視角から」研究代表者：山本登志哉）を受けて行われた。

Abstract**Pocket Money and Sense in Money Matters
Children's Affluence and Poverty of Japan, Korea, China, and
Vietnam****Sunah Oh**

In this study, comparison of four nations was performed about the life of the children involving money. A questionnaire survey was conducted on students in the 5th grade of an elementary school, 2nd grade of a junior high school, and 2nd grade of a high school in Japan, Korea, China, and Vietnam. The questions focused on the following points: how children get money, children's actual behavior and consciousness of social norms (judgments of right and wrong), peer relationships, and parent-child relationships, in relation to children's usage of money. The results are as follows. A spread of a children's consumption world was high in order of Japan, South Korea, China, and Vietnam. The Japanese child's consciousness that pocket money is its own money was the highest, and the child of Vietnam was the lowest. The Japanese child was negative to performing a treat and a loan in friend-related, and South Korea was affirmative. Based on these results, consideration was carried out about affluence and poverty.